
真・恋姫†無双 魏END後

飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 魏END後

【Nコード】

N9717H

【作者名】

飛鳥

【あらすじ】

この小説は真・恋姫†無双の魏ルートのEND後を書いたものです。

第0話・プロローグ（前書き）

「さよなら……愛してたよ華琳……」
「あれから三年後……」。

第0話：プロローグ

「さよなら……愛してたよ華琳……」

あれから三年後……。

蜀

劉備は期待を抑えきれず馬を走らせていた。

「ほらあゝ、二人とも早く早く〜！」

「桃香様、お待ち下さい。お一人で先行されるのは危険です。貴女はもう一国の主なんですから」

それを追い掛ける関羽達は気が気では無かった。

「そうなのだ。こんなお日様一杯のお昼に、流星が落ちてくるなんて、どう考えてもおかしいのだ」

「鈴々の言う通りです。もしやすると妖の類かめしれません。慎重に近付くべきです」

それを屈託のない笑顔で笑いながら劉備は答えた。

「そんなことないよつ絶対っ！華琳さんだって言ってたじゃないっ。こんな日にあの人は来たって！」

劉備の訳の解らない自信に関羽達は苦笑いを浮かべながら着いて行くしかなかった。

それから一刻後、張飛が流星が落ちたと思われる所に寝ている人物を発見した。

「あにや？ あんなところに人が寝ているのだ」

張飛がピューッと走っていったのを見て愛紗が呟いた。

「ちよっ……！ やれやれまったく！ あれでは桃香様を諫めた鈴々も変わらんではないか！」

関羽の気苦労は三年たった今も相変わらず続いているようだった。

「しかし一体、桃香様は何故あの男…天の御遣いにこだわるのだから？」

魏の将達の思い人なのは知っているが役職は一介の警備隊の責任者はずだったはずだ。何故そこまでこだわるか関羽にはわからなかった。

第0話：プロローグ（後書き）

中途半端にならないように頑張ります。

第一話

一刀が目を醒まして辺りを見回すと見馴れた広大な土地が広がっていた。

「あれ？俺はこの世界から消える筈じゃ無かったのか……」

何故か分からないが瞬時に理解できてしまった。そこが消える前にいたあの世界だと……。

「良しっ！こうなったら善は急げだ！」

とりあえず無事に戻って来たんだし蜀の城に戻るか！まだ華琳達は国には帰って無いだろうし

「……ええっと……でも……ここは何処だ？」

辺りをキョロキョロ見回していると地平線の彼方から土埃が舞い上がって何物かが近付いて来た。

「……一応武器は構えておこう。また現れた時みたいに賊だったら困るし」

暫くして目の前に立ったのは劉備達、蜀の三人達だった。

「おはよう！劉備さん同盟の宴はまだやってる？」

俺がにこやかに劉備さんに朝の挨拶をすると劉備さんより先に関羽さんが、呆れながら

。

「三年も宴をする国が何処に在りますか！それよりも今まで何処に居たのです？皆さん悲しんでいましたよ」

いきなり関羽さんに怒られると劉備さんにも。

「そうですねー！春蘭ちゃんも怒ってましたよー！『あのバカっ！華琳様を悲しませおつて。見つけたら首をはねてやる』って怒ってましたよ」

「……………は？……………三年？……………どういう事ですかそれ？」

「ですから！先程も申しましたようにあれから三年前に貴方様が突然姿を消したと曹操殿に」

「……………は？……………三年？……………どういう事ですかそれ？」

「ええええええっ！じゃあ今はあれから三年後！？」

それから一通り三人に説明を受けた後にとりあえず蜀の城に向かう事にしたのであった。

第二話

蜀の城下に着いた俺はひとまず城内の謁見の場に招かれた。緊張しながら他の将達を見回していると劉備さんにクスクスつと笑いながら話しかけられた。

「みんな綺麗だからって鼻の下をのばしてると華琳さんに言い付けますよ」

俺はジロリと睨む関羽さんの眼に慌てて両手を振って否定しながら劉備さん達に答えた。

「みつみんな綺麗だなあとは思ってたけどやましい気持ちはないから」とすると劉備さんの近くにいた趙雲さんが笑いながら凄い事を言っていた。

「ハッハッハッ北郷殿の武勇伝は曹操殿たちから聞き及んでいますぞ」

：華琳さん俺は他の国でも種馬扱いって新たなイジメですか？と俺が哀しみにふけていると劉備さんが下から覗き込むと、いきなり凄い事を言ってきた。

「これから北郷さんの事をご主人様と呼んでいいですか？それと今度からわたしの事を真名の桃香と呼んで下さいね」

その言葉に関羽さん達は驚いて、劉備さんに関羽さんが聞いた。

「桃香さま？それはどういう事ですか？ましてや真名まで」

すると劉備さんはニコツと笑いながら関羽さん達に答えた。

「だってこの乱世が終わったのは天の御遣いの北郷さんのお陰って華琳さんが言ってたでしょ。だから御遣い様の北郷さんは私の御主人様なの」

すると関羽さん達も自分たちの主やこの三年で仲良くなったのであろう魏の皆も認めているから自分達もとみんな真名を預けてくれた。焰耶と詠、音々音の三人は物凄い渋々だったけど。

だけど、皆がここまで信賴して真名を預けてくれている。信賴してくれた皆に恥ずかしくないように、何か頑張ろうと思えてくる。

何か向こうに戻る前に何でもさせてくれと桃香に頼むと、魏に戻る前に折角だからいろいろと意見を聞かせて欲しいとの事で朱里や離里と学校を創る為の勉強会等することになった。

第三話

やれやれ、何から始めれば良いのやらと考えていると朱里から提案が出された。

「たとえばですが御主人様？とりあえず天の国の私塾ではどんな事が教えられていたのですか？」

せつかく具体的な案が出されたので考えてみる。……うううん。とりあえず文字の読み書きと簡単な数学は基本だろ。これを徹底しないとな。この時代じゃ文字も読めない大人もいるくらいだし。

「とりあえず簡単な読み書きと計算を教える所から始めないかない人達が多いみたいだし」

すると朱里は、ほわあつと感心の声を上げられた

「御主人様の国では読み書きが出来ない人がいないんですか？凄いですう！」

雛里もなによりも基本は大事ですよ。と感心してくれたように何よりだ。そのほかにも給食制度や学費制度、その他もろもろを話あつて一日目の勉強会が終了した。

そしてその夜、桃香達が歓迎の宴会を催してくれた。部屋に呼びに来てくれた、たんぽぽに手を引かれと宴会場である中庭に行った。そして俺はこの時代では無いはずの立食パーティ形式になっている事に驚いていた。すると横から桃香が教えてくれた。

「華琳さんがこんな風にした方が動きやすくて良いんじゃないって教えてくれたんだよ。立食ばあていって言うんだって」

桃香言われ不覚にもちよつとじゝんときてしまつた。俺が言っていた何気ない一言を覚えていてくれたんだな。桃香に連れられて上座の方に行きまだ会つて無い人達と紹介されてびっくりした。何と袁紹達が生きていたのだから。

「……袁紹生きてたんだ」

すると袁紹は顔を真っ赤にしながら、

「ななななつっなんつて失礼な下男ですの。この袁本紹があんなクルクル髪の小娘の華琳さんに負ける訳有りませんわっ」

官度で負けたじゃんっていうのは心に置いといて顔良も文醜達も少しの間だけだが知り合つた仲だが、戦も終わったのだから生きていてくれて素直に嬉しかった。

「あの戦の後から見なかったから顔良も文醜も無事で良かったよ」

「お久し振りです」

「よつ元氣にしてたかアニキ」

挨拶のすんでなかった人達とも一通り挨拶も終わり宴会が始まつた。うちの季衣も凄かつたけどこの三人も凄いなと見ているのは鈴々と翠、恋。

『バクバク、ムシャムシャ、モグモグ…ゴクン』

あつちはあつちで凄い勢いで酒が無くなつていくなと星達の方を見ていると星に呼ばれた。

「そんな所でぼーっと立ってないでこっちで一献どうですか主？」

霞と呑んだ時みたいなイヤな予感だったが主賓なのに行かない訳がいかないので行くとそこにはやっぱり蜀が誇る酒豪の皆様だった。ちよつと嫌な顔をしたのがばれると、

「……あらあらおばさん達と呑むのが、そんなにお嫌ですか？」

わざとかとても悲しそうな顔をするので慌ててそんなことないと否定していると桔梗がならそういう顔をするなど盃を渡してきた。

「さあつ。ならば何を遠慮することがある。さ、こちらに来るが良
い。わしからも酌をしてしんぜよう」

さ、どうぞと渡された酒をグイッと一口呑めば……。

「ゲホッゲホッ何これすげえキツいんだけど」

飲んだ酒は喉を焼くアルコールの強さと、独特のクセ。苦いような、生臭いような……。何の酒がよく分からない酒だった。何の酒かと考えていると星がフツと笑いながら桔梗秘蔵のまむし酒と教えてくれた。カンベンしてくれよと思っていると色っぽい笑顔で桔梗が、

「滋養強壮にも効くぞ。無論、強精にもな。そんな呑みぶりでは
女は付いてきませぬぞ、お館様」

と言われドキッとしたがそれでもたまらんなあと嫌そうな顔をして
いるとそれをキュッと軽く呑みながら星が、

「まったくだ、風からは仕事をサボっているときの呑みっぷりは凄

かったと聞いてますぞ」

いつもじゃないと慌てて否定したけど多分、一回サボって霞と呑んでしまったときの話だな。

多分、沙和だな風に話したの今度会ったらお仕置きせねばと考えながら、もう一杯だけと一気にあおつくうう！となっていると星と桔梗が、

「やれば出来るではありませんか主」

「だな。そうでなくては呼んだ甲斐がない」

簡単に言われてしまった。どうぞさっ今度は普通のお酒ですと口直しにどうぞと紫苑が普通のお酒を用意してくれた。

しかしさりげなく気を使ってくれる紫苑の心遣いは嬉しいがさっきの一発で酔いが回ってきてしまった。そんなに呑め呑めといわれてもそんなに呑めないよと言うと、桔梗が、

「別に酔った勢いでどうこうせよとは言いでどうこうせよとは言いませんぬ。お館様ももっとこの場を楽しみなされお館様が皆と打ち解けるのための宴ですぞ」

元々、敵味方に別れていたはずなのにその桔梗達の心遣いに感謝していると御主人様「こっちにも来てよ」と上座のほうにいる桃香に呼ばれたので三人に今夜はどうもありがとうと別れを告げると星からは気にするなお陰で酒が呑めると言われて笑われてしまった。

桃香の所に向かった俺は、桃香の所に行き今回はこんな宴を開いてくれてありがとうと桃香に言う。桃香も嬉しそうに喜んでくれ、そうですか？御主人様の為にもみんなの為にも良かったです。と言ってくれ、桃香もちゃんとかういう事を考えて歓迎の宴をわざわざ

開いてくれたんだなあと桃香に感謝しながら今日は皆とガンガン呑むぞと近い夜は更けていった。

第四話

再びこの世界に現れて一ヶ月後。

その日の朝、何故か俺は中庭で鈴々と鍛練の相手をしていた。始めは鈴々と翠の試合を眺めていただけだったが、翠が警邏に出掛けてしまったので代わりに相手をやらされるハメになってしまったからだ。

「ほらほら、どうしたのだ？てあああつ！」

「どわあああああつ！鈴々、ちよつとは手加減してくれ！」

さすがは猛将と謳われた燕人張飛。こんな小さな体でどれだけ重い一撃を放つんだと思いつながらなんとか振り下ろされる蛇矛だぼうを必死に木刀で受け流がす。

「うりゃ、やー、たー！」

「はあああああつ！」

そこへ今日の城内での仕事が終わったらしく愛紗と星がやってきた。

「ほほう…鈴々も手加減してるとはいえ主もなかなか」

「そうだな。聞いた話ではあの夏侯惇とも打ち合えたとは聞いているからな…しかし、ここまでのようだな」

鈴々に木刀を弾かれて蛇矛が眼前にピタツと止まった所で勝負が着いた。

「勝負ありなのだ。てへへっ」

俺そんな嬉しそうな鈴々の頭を撫でながら感謝する。

「流石は世に謳われる燕人張飛だよ全然勝負にならなかったよ」

「にへへ」と喜ぶ鈴々の頭を撫でていると後ろにいる愛紗と星に気付いて声をかけた。

「やあ。ちよつとかつこ悪い所を見せちゃったかな」

「ご謙遜召されるな主。なかなかでしたぞ」

「そうですよ。鈴々も加減をしていたとはいえなかなか」

まあ愛紗と星も喜んでくれたのでなによりだ。鍛練が終わり汗を拭いていると星が質問してきた。

「主。あれは、天の国の剣術なのですか？」

すぐに答えようと思ったがでも多分、やっぱり華琳達と同じ反応なんだあ。と思ったが「ハハッ」と苦笑しながら答えた。

「…ああ。剣道っていうんだ…皆が思ってるのと違って実戦よりも剣技を通しての礼儀作法等の精神修養の為の方が大事になってるんだよ」

俺は華琳達と同じ事を言われると思い、先に…笑いたければ笑うといいよ。俺には全部欠けてるってと言うと意外な反応が返ってきた。

「そんな事ありませんぞ、主」

「そうです。ご謙遜なさらずに、ご主人様。これからの民に必要な考えかもしれません」

……あれ？俺つてもしかして蜀の方が評価高い？

……次の日の朝。

今日は桃香に頼んで警邏に出して貰った。

「魏で警備隊長をやっていた身としては他国の警備体制がどうなってるか気になるしな」

ぶらぶら街を歩いていると、重そうな荷物を抱えている、月と詠を発見したので声をかけた。

「よっ重そうだね荷物、持つよ」

「あ！ご主人様…」

「げ！？なんであんたがここにいるのよ」

びつくりする月と詠の二人から荷物を受けとろつとすると月が困った顔をして、

「困ります、ご主人様。荷物なんて持たせたら悪いですよ…」

すると詠は鼻をフンつとならして月に答えた。

「いいのよ月、どうせ魏では荷物持ちばかりやらされてたんだし」

「そう、そう。気にしないでいいよ。詠の言う通りだから」

沿う言いながらその荷物に手に延ばした瞬間、月の手に軽く触れたらしく、顔を真っ赤になってしてしまった

「へう……。あ、ありがとうございます」

顔を赤らめている月も可愛いなと鼻の下を伸ばしていると詠がバツと構えると鋭い踏み込みから懐に入り込んだ

「でえええいつ」

「ぐはあああ!？」

「!？え、詠ちゃん駄目だよそんな事しちゃ」

詠は月を自分の方に抱き寄せて自分の後ろに隠してあまりのダメージに膝をついてる俺に指を指して、

「あ、あんた今、月に触ったでしょ!ほら月、後ろに隠れて」

「詠ちゃん。やりすぎだよ。」

「そうだよな。詠と違って月は優しいなあ」

そういつて立ち上がろうと上を見ると二人のスカートの中のパンツが見えて、鼻の下が延びて。

「あっ！?...白と縞だ。...はっ！？」

気付いた時には遅かった。既にスカートを抑えて顔を赤らめている月と、拳をプルプル震わせている詠と眼があった。

「へう.....」

「どこ見てんのよ」

「ぐはあああああ！？」

詠に尻を蹴られながらも荷物を運んだ後.....。

「いたたたた...ん？どうしたんだ？」

涙目で鼻を押さえていながら歩いていると酒家の前で騒ぎが起きていた。

俺は、騒ぎを止めに行こうと駆け出すとまだ警備隊が到着していないので代わりに止めに入ろうと腰に挿した木刀を手に酒家の中に入ってしまった。

酒家に入るとでガラの悪そうな男達が酔っぱらって酒家の店主に

からんでいた。俺はやめさせようと近付いてチビと呼ばれていた男にやめろと声をかけると剣先をこちらに向けてきた。

「うるせえんだよ兄ちゃん。黙っててくんない」

俺はその劔先を木刀で跳ね上げると男の鳩尾を木刀の柄の先で突き込んで氣絶させた。それを見て一番デカイ男が背後から襲いかかってきた。迎え撃とうと背後の男に向かい構えると背後から盃が飛んできて男の顔面に直撃した。

「だ、誰だっ？」

アニキと呼ばれていた男が叫ぶと屋根の方から笑い声が聞こえてきた。

「はーっはっはっはっ！ はーっはっはっはっ！ とぅっ！」

その声と共に仮面を着けた星達が現れて名乗りをあげ始めた。

「いよつ等待着ましたあ！」

なんて掛け声も町民から入る。

その時、俺は思い出していた。蜀には仮面を着けた正義の味方が居る事を……。

「天知る！」

「地知る！」

「……神知る」

「我知る！」

「子知る！」

「悪の蓮華の咲くところ！」

「正義の華蝶と」

「悪の蓮華の咲くところ！」

「正義の華蝶と」

「白馬あり！」

そして、またポーズを変えると個人、個人の名乗りを始めた。

「朱華蝶！」

「……恋華蝶」

「星華蝶！」

「仮面白馬！」

「か弱き華を護るため！」

「輝く蹄も高らかに！」

「華蝶の連者」

「白馬の戦士」

「四人揃って」

「……ただいま」

「」「参上!」「」

「……さんじょう」

ドゴーン!!?

そして色とりどりの爆煙が華蝶仮面の現れた背後に打ち上がった。登場した華蝶仮面にアニキと呼ばれていた男があたふたし始めるときには遅く、華蝶仮面達と仮面白馬による大捕物が始まった。

と言いたい所だがいかんせん力の差は歴然だった。

男達を気絶させたのを確認すると、星達はまたポーズを決めると、高らかに勝利宣言を決めた。

「」「正義は…勝つ!」「」

「……勝つ」

第五話

「……この部屋に……一刀が……」

華琳は、蜀での一刀の部屋の前に立っていた。

蜀からの連絡で天の御遣いが、北郷一刀が再び現れたと聞かされた時は我が耳を疑ったが、どうしても自分の目で確かめたくて居ても立ってもいられず、蜀まで来てしまった。

「……まさか、この私がね……。」

自分がここまで弱くなるとは思ひもしなかった。

以前の自分では考えられない事だった筈だ。それぐらいアイツの魅力に皆も参ってしまっていたのかもしれない。実際にアイツがいなくなつてからの城内はしばらくは最悪な状態だった……。

……あれから三年前、一刀との別れの後、泣き腫らした眼が収まるのを待つて皆の元に戻った。しかし気が重かった。

これから、アイツがいなくなつた事を皆に自分の口から話さなくてはいけないのだから……。

自分だけ泣き崩れているわけにもいかなく気丈に立ち上がると城内に戻りと走り寄つてきた桃香にさっそく伝えた。

「……桃香、宴の途中に悪いのだけどちょっと大事な話があるの。部屋を借りられるかしら」

「良いですけど、どうかしたんですか華琳さん？」

「……いいからお願い」

ただ事では無い雰囲気になすがに気付いた桃香は直ぐ部屋を用意してくれた。魏の将が今いなくなつた一人を除いて揃い集まつたのを確認すると伝えた。

「……皆、集まつたわね。大事な話があるのだけどよく聞いてちょうだい」

すると、一刀がない事に気付いた桂花が横にいた華琳に話かけた。

「華琳様、まだ馬鹿が一人まだ来ていないようですが……」

それを聞いた凧、真桜、沙和の三人が、慌てて衛兵と共に探しに行こうとすると華琳が制止した。

「大丈夫よ、三人供。探しに行かなくて。あの馬鹿は……アイツはもうここにはいないんだから」

いきなりの華琳の言葉に一瞬、場が静まりかえつたが霞が呑みかけの盃を片手に膝をバシバシ叩きながら切り出した。

「何を言うとなんのや孟ちゃん。冗談きつついで、どうせ一刀の事やから招集に気付かんと蜀や呉の女の子にでも手え出して口説き回つとるだけやろ」

霞の言葉に皆が頷いて一斉に笑いに包まれるが、華琳は全く真剣な表情をやめない事に皆の笑いがピタッと止まった。

「ハハハ！まさかあ！嘘やろ嘘って言うてや孟ちゃん」

取り乱して自分の肩に掴みかかる霞の手を優しく掴むと、その手を自分の胸に当て優しく体を抱き寄せた。

「ごめんなさいね霞。嘘ではないの」

華琳のその言葉に本当にいなくなった事気付いた季衣と流琉は春蘭と秋蘭に抱きついた。

「春蘭様あ……兄ちゃんが兄ちゃんがボク達の前からいなくなっちゃったよ……なんで？なんでなの？兄ちゃあああん！」

「兄様が私たちの前からいなくなるなんて兄様あつ、兄様あつ……」

春蘭と秋蘭に泣きついていてる季衣と流琉のその様子に霞は突然ふらふらと立ち上がり、後ろに下がると扉まで走って行き華琳に叫んだ。

「嘘や！一刀は戦が終わったらウチと旅にでようって一緒に羅馬に行こうって約束したんやつ！」

探しに出ていこうとする霞に凧も立ち上がると。

「霞様！わたしも行きます！隊長にはまだまだ教えて頂きたい事が沢山ありますから！」

凧のその言葉に真桜と沙和も立ち上がり口々に。

「その通りや凧！ウチも行くで探しに！」

「そうなの！隊長の事だからまだその辺りにいるかも知れないの！」

四人が飛び出て行き、こうなる事がなんとなく予想出来ていたのが華琳はフウとため息をつくとスツと立ち上がり残った他の将達に声をかけた。

「ごめんなさい貴女達。私も独りになりたいの今日はこれで終わりにするわ。貴女達も部屋に戻って休みなさい」

「あつ！？……華琳様っ！」

立ち去ろうとする華琳を呼び止めようとするが春蘭は呼び止める事が出来なかった。華琳の為に将になって長いこと秋蘭と供に傍に居たがこれほどまで辛そうな顔を見たのは始めてだったからだ。

「おのれ！北郷一刀！華琳をこれほどまでに悲しませおって！」

自分ではどうしようも出来ない事が齒がゆかった。

「くそっ！」

思わず大剣を床に叩きつけ、ふと隣を見ると季衣と流琉を気遣っている秋蘭の目尻にも涙が光っていた。

一方、唯一この出来事にて笑い声を上げている少女がいた。そう桂花だ。

「くつくつく。これであの邪魔者が本当になくなったわ。あいつがいなくなったお陰で華琳様の御寵愛を一身に受けることが出来るわ」

そう言いながらも桂花の眼からは大粒の涙が溢れているのだった。

……次の日の朝、華琳は今も探し回っている霞たちの心情をくんで暫く彼女達を逗留させてもらうように桃香に挨拶に向かった。

「桃香悪いのだけど暫く霞たちの事をよろしく頼むわ私達は戦後の復興の為に直ぐにでも魏に戻らなくてはいけないし」

「事情は聞いてますからそれは良いですけど、……良いんですか？華琳さんは残らなくて……」

心配そうに聞いてきた桃香に華琳は毅然と答えた。

「良いのよ私は……」

……そう、自分と違いあの娘達は別れの挨拶さえ出来なかったのだから。それに残された自分達はこんな所では止まってはいたられない。アイツと共に創りあげたこの平和を維持し発展しなければならぬのだから……。

（……もう、あれから三年もたったのね）

緊張で胸が張り裂けそうだったが覚悟を決め華琳が緊張の面持ちで扉を開けると……。

一刀がいつも着ていた制服が寝台に置いてあるだけで誰もいなか

った。

「……あの馬鹿！せっかくこの私自ら来たのに何処に行ったのかしら」

華琳はプリプリ怒りながら部屋を見渡すと椅子に掛けてあった一刀の制服が目についた。

「……あれはいつも一刀の着ていた服……」

寝台の縁に座り、椅子に掛けてあった一刀の制服を抱くと一刀の匂いに包まれた華琳は強行軍の疲れからかそのまま服を抱きしめたまま眠ってしまった。

華琳が眠り数刻後……。

「今日はこれくらいにしておくか……」

先程まで素振りしていた木刀を置いて、軽くひと息。

この世界に帰って来てからは寝る前には欠かさずやっている鍛練を終えると、井戸の水で体を拭い部屋に戻ると部屋の明かりが扉のすき間から漏れていた。

「あれ？……俺、消し忘れたかな？まあ、忘れたただけだろ」

扉を開けるとそこには、なんと自分の椅子にかけてあった制服を抱きしめて寝ている華琳がいた。

「なんで、華琳が此処に……」

まだ、魏に使者が送られて間もない筈だ。なのになんで……。

俺は、夢かと思い頬をつねってみたがやはり夢では無い。

「……華琳」

俺は、そつと華琳の寝ている寝台に腰を降ろすと、華琳の髪の毛をそつと撫でた。

「……ただいま、華琳」

俺は、寝台の縁に倒れかかっている華琳を起こさないようにそつとお姫様抱っこで持ち上げると、そのまま自分の寝台に寝かせようとした。

「どつこいしょ……？」

寝台に華琳を寝かせようとしたら華琳が俺の首に腕をギュツと抱いた。

「何だ起きてたのか」

「ええ。貴方が部屋に入って来た時からね。また悪さしないか試してみたの」

俺はハハッと苦笑いを浮かべて華琳を抱きしめ返した。

「……もう懲りたよ」

「……馬鹿っ」

……その夜、何があったかはご想像にお任せします。

第五話（後書き）

……一応、まだ完成させるつもりでいます。

しかし、なにぶんその場のテンションで書いてしまった為に続きが全く思いつきません（T・T）

読みにくいとの事で一応ですが多少、編集をしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9717h/>

真・恋姫†無双 魏END後

2011年3月19日14時16分発行